

Ⅲ 紹 介 Ⅲ

ボブ・ウッドワード著／伏見威蕃訳 『ブッシュの戦争』

澤 喜司郎

(I)

本書は、2001年9月11日の同時テロにはじまるジョージ・W・ブッシュ大統領の100日間の戦いの報告であり、ブッシュ戦時内閣のテロリズムとの戦いにおける意志決定や戦略の歩み、CIA 潜入工作チームおよびアメリカ特殊部隊チームのアフガニスタン現地での活動を大量の新情報にもとづいて克明に描いたドキュメンタリーである。著者は「戦争の計画と実行には秘密情報が絡む。本書では、不用意に軍事機密を暴露したり、外国政府との微妙な関係を損ねることなく、従来知られていなかった新事実を具体的かつ詳細に明かすようにつとめた。とはいえ、機密扱いの情報をすべて削除したわけではないので、もしアメリカ合衆国に検閲官というものが存在していたなら——幸いなことに存在していないが——もっと厳しく削除を命じられたに違いない」と記している。

著者のボブ・ウッドワードは米国を代表するジャーナリストで、ワシントン・ポスト紙の社会部若手記者時代に同僚のカール・バーンスタイン記者とともにウォーターゲート事件をスクープし、ニクソン大統領退陣のきっかけを作ったことで知られる。

なお、同氏の著書には本書の他に、ウォーターゲート事件を扱った『大統領の陰謀』（バーンスタインとの共著）、湾岸戦争をテーマにした『司令官たち—湾岸戦争突入にいたる「決断」のプロセス—』や『権力の失墜—大統領たちの危機管理—』、『大統領執務室—裸のクリントン政権—』などがある。

(II)

ブッシュ戦時内閣のテロリズムとの戦いにおける意志決定の場が国家安全保障会議であり、その主要なメンバーはブッシュ大統領、チェイニー副大統領、パウエル国務長官、ラムズフェルド国防長官、ライス国家安全保障問題担当大統領補佐官、

テネット CIA 長官，マイヤーズ統合参謀本部議長，カード大統領首席補佐官等々である。

ここで興味深いのは，国家安全保障会議のメンバーにはブッシュ・シニア政権で湾岸戦争における意志決定に参画していたチェイニー（湾岸戦争時の国防長官），パウエル（同，統合参謀本部議長），ウォルフォウィッツ国防副長官（同，国防次官）がいることである。ブッシュはこのことを意識し，「この戦域における彼らの前回の経験によって，新しい道すじが定められることは，なんとしても避けたい」，「テロとの戦いを，古い敵を討つ口実を利用するのは許さない」と考えていた。同時テロ翌日の早朝，チェイニーがブッシュに「長官クラスによる戦時内閣のたぐいを組織し，大統領の代理を議長に据えたらどうでしょう？戦時内閣で選択肢を練りあげてから報告します。意志決定を簡素化できるかもしれません」と進言したが，ブッシュが「だめだ。戦時内閣はわたしが運営する。これは最高司令官である大統領の職務だ——権限を委譲することはできない」と答えたのは，おそらくテロとの戦いを古い敵を討つ口実を利用されるのを嫌ったからであろう。

その午後の国家安全保障会議で，「テロリズムを相手に本腰で総力戦を行うのならイラクをいずれ攻撃目標にせざるをえない。9・11はただちにフセインを征討する好機を提供してくれた」，「アルカイダだけではなくイラクも攻めればいい」とラムズフェルドが提案し，ウォルフォウィッツも「テロリズムに対する戦争の第一ラウンドでイラクを主要攻撃目標にする」という方針を唱えていたが，パウエルは「どのような行動にも大衆の支持が必要です。…国民はわれわれがアルカイダに対して手を打つことを望んでいます」と，現時点でのイラクへの攻撃には反対であると主張した。

結局，ブッシュは「いまはその問題の結論を出す時機ではない。自分のいまの主な目標は，テロリストをとことん締め付けて根絶やしにするような軍事計画を示すことだ」として，イラクを攻撃しないという決定を下したが，戦時内閣ではチェイニーとラムズフェルドは積極的に，パウエルは消極的にこの問題を煮詰めていったのである。「パウエルからすれば，機械のなかの幽霊はラムズフェルドとチェイニー」で，パウエルの国際主義とチェイニーの単独行動主義の対立がこの国家安全保障会議で次第に鮮明になっていったのである。

（Ⅲ）

ブッシュは同時テロ当日の夜，大統領執務室から国民に向かって演説し，その中

で「われわれは、テロ行為をもくろんだものとテロリストをかくまうものを区別しない」と明言し、それはチェイニー、パウエル、ラムズフェルドに相談せずに下された重大な外交政策の決断だった。このことを著者は「国家安全保障問題に関する試練や教育を受けていなかった大統領は、ろくな地図も持たずに、戦争という複雑で長い道を歩もうとしていた」と評している。

翌12日の国家安全保障会議で、「アルカイダのみでなくテロリズムと幅広く戦うのですか？ 支援に際して、より広範な体制を模索するのですか？」というラムズフェルドの問いに、当初の攻撃目標が拡散することに懸念を抱いていたブッシュにパウエルは同意し、「アルカイダという特定の目標を据えてまず各国を結集させるほうが容易だ。アルカイダだけに絞れば、まず間違いなく国連の承認決議が得られるはずです」と論じた。しかし、ラムズフェルドは「アルカイダ掃滅という目標を中心に築いた連合は、その任務を成就したとたんに崩壊し、多方面でテロリズムとの戦いを続けることが困難になる」と述べ、テロリズムに打撃を与えるならばテロリストを育てて他国に送り出している国を攻撃目標にすることは避けられないと考えていたチェイニーは、「連合は目的だとみなさんは考えているようだが、そうではなく、テロリズム一掃の手段であるべきです。世界各国の支援は望ましいが、連合の動きに制約されたくない。任務が連合の輪郭を定めるのです。その逆ではいけない」と反論した。

9月15日の国家安全保障会議で、パウエルが「連合に加わる各国は、アルカイダを討伐する用意はあるでしょうが、他のテロリスト組織やテロ国家まで戦いを拡大すれば、脱落する国もあるはずです」と力説したのに対して、ブッシュは「テロリズムとの戦いの条件を外国に左右されるなど断じて許さない。ある時点で残っているのはわれわれのみかもしれない。それも結構。われわれはアメリカだ」と言い、パウエルはこのブッシュの言い方は非現実的だと思ったが、チェイニーは「パウエルとは逆で、必要とあればアメリカのみでもやると、ブッシュが本気でいったものと確信した」という。事実、19日の国家安全保障会議でブッシュは「戦争遂行の要件によって多国の連合が今後変化すること、国によって要求される援助が異なること、これが単一の遠大かつ不変の連合ではないことを記者会見で強調するよう、パウエルとラムズフェルドに念押ししたのであった。

「ブッシュの戦争」後の2002年5月にヨーロッパ・ロシア歴訪を終えたブッシュは、対テロリズム活動に本腰で取り組む者がどこにもいなかったため、「武力および武力の行使については、われわれはすべての方面の合意を求めるつもりはない。

危険なならず者国家に対処するには、多くの国々の連合や国連は見込みのある方法ではない可能性が高い」とほのめかし、8月にラムズフェルドはペルドントン基地で「正しい行動への“着手は孤独”であるかもしれない」と演説し、著者はこれを「単独行動を示唆する新しい表現」と評している。

そして、10月に「下院と上院はそれぞれ、イラクを一国で攻撃する完全な権限を大統領に与えることを、圧倒的多数によって可決した。…議会は、イラクの脅威から国を守るために“必要であり、適切であると、大統領が判断した場合”には、軍を使用することを、全面的に承認した」のである。その後、国連安全保障理事会にイラク攻撃容認決議案の速やかな採決を迫るために、ブッシュは「国連が無能で無意味な討論クラブに成り下がることを許さない」「このままでは国連は(米国の不参加で失敗に終わった)国際連盟と同じ運命をたどるだろう」と警告し、ラドメーカー国務次官補はジュネーブ軍縮会議で「(国連の理念にもなっている)多国間主義は効果的でなければ意味がない。軍縮会議のように交渉が停滞するだけの多国間主義なら、米国が別の道を探っても責められるいわれはない」と演説した。

(Ⅳ)

9月20日にブッシュは「わたしたちの深い悲しみは怒りに変わり、怒りは決意に変わりました。敵を裁きの場にひきだすにせよ、それ以外の方法で報いを受けさせるにせよ、正義は行われるであります。あらゆる外交手段、あらゆる情報収集手段、あらゆる法執行手段、あらゆる財政的手段、さらにあらゆる武器を用いて、地球全体を覆うテロ・ネットワークを阻止し、打倒します。われわれの対応は、たんなる即座の報復や散発的な攻撃ではありません。国民のみなさんに、これがひとつの戦闘ではなく、長期の軍事作戦であり、これまでわれわれが経験したどんな戦いとも異なったものであるという覚悟を持っていただきたい」と議会で演説した。

そして、2002年1月29日の最初の一般教書演説でブッシュはイラクとイランと北朝鮮を「悪の枢軸」と呼び、「本当に危険であり大惨事を引き起こす恐れがあるのは、テロリストやそれらの国の政府が大量破壊兵器を手に入れやすくなっていることなのだ」と明言した。ブッシュは2001年9月20日の議会での演説でこの危険性について論及する予定であったが、「あまりにもあけすけで大衆にとっては不快だろうと判断して延期した」という経緯がある。つまり、ブッシュは9・11同時テロ直後から本当の危険はテロリストやそれらの国の政府が大量破壊兵器を手に入れやすくなっていることであると考え、「現国防長官のラムズフェルドと元国防長官のチェ

イニーは、いずれも核・生物・化学兵器による戦争（テロを含む…筆者加筆）を強く懸念し」、ラムズフェルドは「大量破壊兵器がアメリカに対して使用される可能性がある」と指摘していたのである。

また「事件が起きるのを待つつもりがなければ、それ以外の選択肢は先制攻撃しかない」と真剣に考えていたブッシュは、一般教書演説の中で9・11同時テロのような「事件が起きるのを待つつもりはない」と先制して行動することをほのめかし、6月には「アメリカにとって深刻な脅威であると考えられる国々に対して先制攻撃を行う」ことをブッシュは正式に表明した。

この先制攻撃という発想は、議会での演説の10日後の9月30日に大統領抜きで開催された長官クラスの会合で、ラムズフェルドが「主張の正しさを公に証明しなければならないという前例はまずい。そのつぎには自分たちの主張の正しさを証明するのに十分な情報がないかもしれないし、われわれに襲いかかる可能性のある脅威に対してわれわれが先制攻撃をかける能力を損なうことになる」という発言に始まり、著者は「先制攻撃という発想は…その後1年のあいだに重要性を増していった」と指摘している。

この先制攻撃に関する国家安全保障会議でのその後の議論については本書には何も記されていないが、著者のインタビューに対してライスは「大量破壊兵器使用の前歴と欲求と意図を有する攻撃的なこの暴君（フセイン大統領…筆者加筆）が、2年ほどで核兵器を保有するというのは、まぎれもなく最悪の恐ろしい事態、とてつもない災厄です。そんな恐ろしい事態が現実になっていいもののでしょうか。…9・11の教訓。脅威には早めに対処せよ」と答え、著者は「9・11同時テロは、アメリカがフセインを討伐するための新しい突破口となった」としている。

また、ブッシュはインタビューで「話し合いで問題を解決するのはどだい無理だよ。それに、いまアメリカは独自の立場にある。われわれは指導者だ。そして、リーダーは、他者の意見をきく能力に加え、行動力を兼ねそなえていなければならない」と答え、著者は「ブッシュの未来像は、明らかに世界を作り直すという野望を含んでおり、人々の窮状を減らし、平和をもたらすには、先制攻撃と、必要とあれば一国のみの行動も辞さないという考えがそこにあった」としている。

(V)

著者はブッシュがインタビューで「わたしは教科書どおりにやる人間ではない。直感で動く人間なんだ」と発言したため、「政治家、大統領、最高司令官であるブッ

シュの役割が、自分の直感——自然のままに出てくる結論や判断——への信仰を原動力としていることは明白だった」とブッシュを評している。しかし、ブッシュに対するこの著者の評価は十分とは言えない。なぜなら、著者自身が本書で記しているように、ブッシュが「わたしはありとあらゆるリスクを評価しておきたいと考える人間なんだ」、「つねに分析し、リスクに基づいた決断を下す」と述べているからである。つまり「ありとあらゆるリスクを評価し、つねに分析し、リスクに基づいた決断を下す」人間が“直感”で動くはずがなく、逆に“直感”で動く人間は「ありとあらゆるリスクを評価し、つねに分析し、リスクに基づいた決断を下す」ことではない。本書を読んで、筆者はブッシュを「ありとあらゆるリスクを評価し、つねに分析し、リスクに基づいた決断を下す」人間で、“直感”で動く人間ではないと評価した。著者とはまったく逆の評価である。

また、ブッシュが「わたしは教科書どおりにやる人間ではない。直感で動く人間なんだ」と言うのは、最高司令官である大統領としての閣僚に対する信頼と思いやりの表れであり、全責任を一身で背負おうというメッセージである。それは、アフガニスタンの膠着状態にマスコミが疑問を投げかけ、「ニューズウィーク」誌がベトナムを想起する「泥沼」という言葉を使い、「ワシントン・ポスト」紙が「誤った戦闘計画」と題する特集記事を掲載し、閣僚の間でも不安感が漂い始めていた中で、ブッシュが「自分たちの戦略を信じろ」「全員を信頼している」と述べたこの言葉に表れている。

このように考えると、著者とは違う、もう一つの「ブッシュの戦争」が見えてくる。真実と真実の行間をどのように埋めるか、それは読者によって異なるが、それはそれで良い。私たちは真実を知る権利を有するが、他方で自ら学習しなければならない義務もある。そのため、多くの方々に、とりわけ学生諸君に本書の一読をお勧めしたい。真実と真実の行間を自身で埋めて欲しい。

(日本経済新聞社、2003年、483＋viii頁、2,200円＋税)